

2011年9月

～全国4年制大学対象～

大学の「秋入学」導入に関する意識調査

高等学校における進路・進学説明会を中心に、教育情報、進学ニュース等を提供する株式会社ライセンスアカデミー（本社：東京都新宿区）の教育・進学シンクタンクである進路情報研究センターでは、「秋入学」導入に関する大学への意識調査を実施しました。

この調査は全国の4年制大学を対象に、今夏、教育界のみならず社会全体で大きな話題となった「東京大学が秋入学の導入を検討」について、どう受け止めたのかを明らかにすることを目的に実施されました。

個別大学内での関心度や秋入学の是非、実施に伴う影響など、幅広く問う内容になっています。

主なポイント

■東京大学の動向に過半数が関心

東京大学の導入検討について、「大いに」と「多少」を合わせると、合計52.1%の大学が注目していることが分かった。

■自学での導入は4割が「不要」

「4月入学と並存」「4月入学廃止」という、いわば「秋入学肯定派」は合わせて43.0%。他方、「秋入学不要」という声も少なくなく、39.5%にも達した。

■メリットは「留学生増加」

「留学生増加」「帰国子女の入学」について期待が高まっている。

■デメリットは「ブランク」

導入した場合、「高等学校との円滑な接続」および「大学卒業後、就職までの期間活用」について危惧する回答が多く寄せられた。

■「4月入学＝国際化阻害」は疑問視

「多少影響がある」が53.2%で最多だが、「あまり影響なし」が25.9%と続く。阻害因子の一つには違いないが、影響の大きさをどの程度と見なすか、大学間で意見が分かれるようだ。

(株) ライセンスアカデミー 進路情報研究センター

URL <http://licenseacademy.jp/>

〒169-0073 東京都新宿区百人町2-17-24 TEL 03-5925-1641 (代)

担当：加藤泰志 e-mail: yasu-katou@daigakushinbun.com

●調査概要

調査には、ファクシミリ送信によるアンケート用紙を用いた。調査対象は日本全国の4年制大学576校。東京大学は除外した。

調査期間は、8月3日から9日までの7日間だったが、それ以降月内に到着した回答についても集計に加えた。

最終的な回答校数は263校で、回答率は45.7%にのぼった。

1. 東京大学の動向に対する関心

「東京大学が『秋入学』の導入を検討している」という情報について、その関心の程度を聞いた。

「大いに注目」は7.2%、「多少注目」44.9%、「あまり注目せず」25.9%、「ほとんど気にしない」15.2%といった結果だった。「大いに」と「多少」を合わせた「注目」は52.1%となり、過半数に至った(図1)。

一方、「あまり注目せず」「ほとんど気にしない」という回答も、合わせると40%を超えており、大学界全体で見るとほぼ二分された形となった。

2. 自学での導入について

次に、入学時期と自学における導入の可否について質問した。

「4月入学と並存」26.6%、「4月入学廃止」16.4%、合わせて43.0%。これらを「秋入学肯定」と見なせば(以下、「肯定派」)、「秋入学不要」は39.5%(以下、「不要派」)。両者が拮抗する結果となった(図2)。

「肯定派」「不要派」のいずれにも属さない「その他」は10.7%だった。「その他」における自由意見には、「分からない」のほか、「大学院のみ導入」「留学生のみ適用」という「限定導入」の意見も寄せられた。

3. 「秋入学」のメリット

「秋入学」のメリットについては、選択肢を与えて複数回答可で尋ねた。

「留学生増加」49.8%、「帰国子女が入学しやすい」44.9%、「社会人が入学しやすい」16.0%という順で、「メリットなし」は10.3%に過ぎなかった。

表1からは、「不要派」であっても、「国際化」促進についてはある程度、効果・効用を認めていることが分かる。また、「肯定派」であっても、一定数が「メリットなし」と答えているのも興味深い。

また、自由意見としては、「浪人生が1年待たなくても済む」「日本人の留学が促される」という内容も散見された。

4. 「秋入学」のデメリット

デメリットについても、選択肢を与えて複数回答可で尋ねた(表2)。

こちらは、肯定派・不要派で差が開かなかった。全集計で見ると、「空白が生じる」46.0%が圧倒的で、以下、「有力大だけ有利」11.8%、「日本の伝統が失われる」4.9%。一

部の報道などでは、「桜の時期＝入学式」という「伝統」が喪失することを憂える声があったようだが、大学への調査ではそれほど重視されていないことが分かった。なお、「デメリットそのものがない」という回答も 8.8%あった。

自由意見としては、「高等学校との接続の不具合」「国家試験の受験時期と卒業のタイミングの不一致」「就職活動全般への影響」「3年半の修学で卒業認定する大学の出現」など、卒業後に生ずる「ブランク」に関わる内容が多数を占めた。さらに、「春と秋の二種類のカリキュラムを準備するため、小規模校では授業が組めない」「教員負担の増大」など切実な内容もあった。

5. 高校卒業後→大学入学までの過ごし方

3月に高校を卒業し、9月に大学に入学した場合、その期間は5カ月にも達する。有益な活用が望まれるところだ。

そこで、六つの選択肢を示し、複数回答可でその過ごし方を尋ねた。「入学へ向けての学習」62.7%、「社会体験」58.2%、「ボランティア」47.9%、「インターンシップ」26.2%、「アルバイト」6.5%、「部活動で後輩指導」4.9%の順に挙げた(図3)。

推薦入試やAO入試で合格した入学予定者は、入学するまで日数がある。その期間、無為に過ごさないよう課題を与える大学が少なからずある。「入学へ向けての学習」が1位だったのは、そうした背景と無関係ではないだろう。

6. 大学卒業後→企業入社までの過ごし方

大学に「秋入学」した場合、入学時期にもよるが、卒業時期は8月または9月になる可能性が高い。そうした卒業者が就職する場合、入社する4月まで半年近くの「ブランク」が生じる。こちらの過ごし方については自由記述で回答を得た。

キーワードに基づいて集計すると、「ボランティア」15.2%、「インターンシップ」14.1%、「社会体験」12.5%など、高校卒業後の活用に準じた内容が寄せられた。中には、「資格取得」「社会人としての基礎的知識習得」など自己啓発に活用して欲しいという回答もあった。

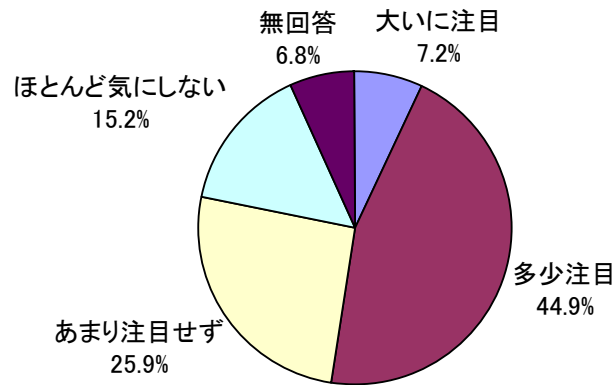
なお、設問は、「過ごし方」を問う内容だったが、企業に対して「秋入社促進」や「通年採用」を求める要望も挙げられた。

7. 4月入学は国際化を阻害しているか

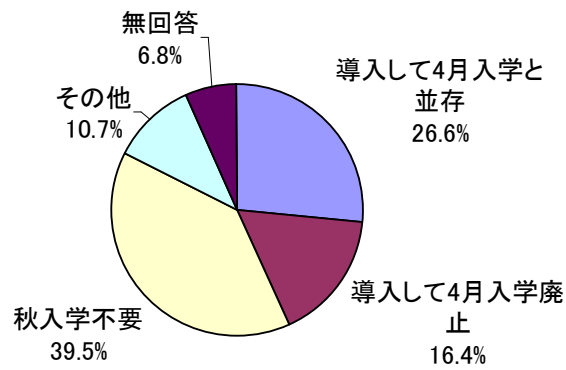
東京大学が「秋入学」の導入を検討する背景には、急速なグローバルスタンダードへの対応が立ち遅れているとの認識が根底にある。つまり、現行の「4月(春)入学」では、国際化を阻害していると見なされているようだ。

そこで、「4月(春)入学」が国際化阻害にどの程度影響しているかを尋ねた(図4)。「大いに影響がある」7.6%、「多少影響がある」53.2%、「あまり影響なし」25.9%、「ほとんど関係ない」6.1%。影響自体は認めるものの、その大きさは問題視していない大学が多いようだ。

■ 図1 東京大学の「秋入学」について



■ 図2 入学時期について



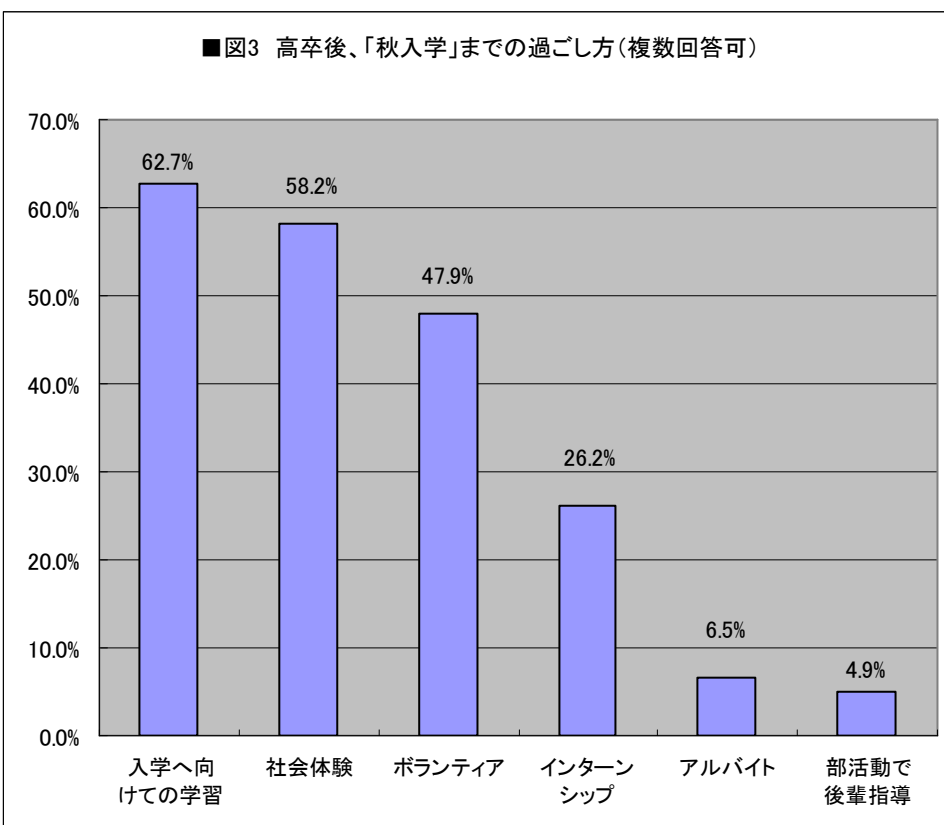
■表1 「秋入学」によるメリット(複数回答可)

	肯定派	不要派	全体
留学生増加	62.8%	46.2%	49.8%
帰国子女が入学しやすい	55.8%	39.4%	44.9%
社会人が入学しやすい	16.8%	17.3%	16.0%
メリットなし	7.1%	18.3%	10.3%

■表2 「秋入学」によるデメリット(複数回答可)

	肯定派	不要派	全体
「ブランク」が生じる	49.6%	47.1%	46.0%
有力大だけが有利	9.7%	15.4%	11.8%
デメリットなし	9.7%	8.7%	8.7%
日本の伝統が失われる	3.5%	7.7%	4.9%
国によっては留学生が減る	0.9%	0.0%	0.4%

■図3 高卒後、「秋入学」までの過ごし方(複数回答可)



■図4 4月入学は国際化を阻害しているか

